

分科会 独立行政法人化問題

最初に、九大・小早川氏から、今年度に入ってから文部省・国大協の対応の意味や問題点に関する詳細な報告をいただきました。その後、この総論的報告をもとに、文部省「調査検討会議」の議論に国大協が加わることは是非・評価を中心に意見交換を行いました。その結果、国大協の持つ矛盾の性格が明らかになると同時に、それを見すえた上での働きかけの重要性が確認されました。

次に、大分大、宮崎大からの口答報告を中心に、九州における大学間の再編統合の動きに関して、独法化との関連を明確にすべく質疑応答を行いました。

最後に、鹿児島大・坂本氏、宮崎大・恵下氏に、それぞれの単組が取り組んできた独法化反対の運動を紹介いただき情報交換を行い、今後運動をどのように継承・発展させるべきか議論しました。これまでの運動で有効だったのは、地方における国立大学の重要性や独法化がもたらすであろう授業料の値上げを強調することなどでした。今後は、国立大学のおかれた厳しい教育・研究・労働条件やその中で達成されてきた高水準の成果等の現状を大学内外に正確に伝えること、今までとは違った角度からマスコミ等を使ってわかりやすく有効なアピールを試みること、誤った国立大学像に対する即座の反駁、私大教連との共闘、組合ならではの労働条件に立脚した主張の重視等、さまざまな指摘と舌捲な議論が行われました。



分科会 青年

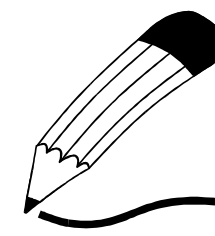
今回の青年分科会は5名の参加で開催された。九州、全国の青年活動の経過報告より、本分科会参加単組の青年との比較をし、青年層の考えを探ってみた。前々から言っていることであるが、青年層は活動に対して奥手のようである。ことを起こすプロセスを知らないという理由もあるし、ただ単に無関心なのかもしれない。そんな彼らでもいいたいことはあるものだ。その言いたいことを表だてて言えないそれが今の青年層である。そんな青年層の本音を引き出すにはやはり継続したきっかけづくりが必要である。知った仲間同士だからこそ本音を引き出せることもあるし、それを活動としてやっていくこともできる。ただ、そのよきなきっかけをつくるのが誰なのか？このままの青年層の意識では独立行政法人化の波をどう乗りこなすのか？意識改革が必要ではないかなどの意見交換が行われた。



分科会 阿蘇の植物と草原



《阿蘇が世界に誇る河口・草原・植物をビデオと講演で再認識》
有史以来3回の爆発にも耐え、火口付近1,500種、草原に600種の大塚系、北方系植物が生存。九州の火山地帯にのみ生きるヤマキリンシマは、傍らに生えるヤシャブシに覆われるが、火山の噴気ガスに対する耐性が勝るため生存している。
一方、今後の課題は、草原の広さが年々狭くなっている点。理由は人工造林、高冷地野菜の栽培、リゾート開発等。また、農業経営構造の変化が草原の利用を変えている。阿蘇の草原に放牧される牛達は、機械化によって労働力としての価値を失い、化学肥料への転換によって牛糞の供給源として価値も失いつつある。深刻なのは、1,000年も続いた森林化を防ぐための野焼きの継続が困難になっていることである。



課題別分科会Aその1

8.19 12:30-15:00



速報



草泊まり

8月19日 18:00